



不明熱・不明炎症 レジデント マニュアル

國松淳和=編

定価：本体 4,500 円＋税
B6 変型・498 頁／医学書院／2020
[ISBN978-4-260-04201-7]

“クニマニア”のみならず、 「不明熱・不明炎症」を扱う 全医師必携のバイブル

評者 鈴木富雄 大阪医大病院総合診療科科長

本書の「序」は、次の文章で始まる。

不明熱の臨床はざっくりと次の2つの問題を内包しています。

- ①発熱へのアプローチが不適切で、本来不明熱ではない発熱が「不明熱」とされる。
- ②本当の不明熱は文字通り原因が「不明」なため、臨床では未知の事柄への対処を強いられる。

不明熱の診療を向上させるには「基本と応用」を押さえることが必要です。

「基本」というのは①に、「応用」は②に対応する力にそれぞれ相当します。

本書は、主に②に関して“expert opinion”を世に発信し続けていた編者が、気鋭の執筆陣とともに、①②の対処に関する記述を連結し、不明炎症（不明熱の定義には当てはまらないが持続する原因不明な炎症性病態）も含めて網羅したうえで、臨床で実践しやすい形に編集したもので、コンパクトながら、その実、全編 480 頁に及ぶ意欲作である。

さて、この渾身の1冊に私たちはどのように対峙したらよいのであろうか？

初学者であれば、日常診療のなかで疑問を抱いた時に、目次や索引を利用して辞書のように使用してみることをまずはお勧めする。実践のなかでの問題意識をもって該当ページを読み込むことにより、不明な病態を解き明かす必要な知識が自然に身についてくる。目の前の症例に即して詳細な記述を照らし合わせ、先人たちの知見を自らの血肉にしていって、その過程こそが極めて大切なのだ。

経験豊富な指導医であれば、ぜひ一度まとまった時間を見つけて、8章の「診断に結びつく重要な特殊臨床症候」だけでもよいので、アンダーラインを引きながら通読していただきたい。今までの診療のなかで経験的に感じていたことや、ある程度までつかめていたが確信が得られなかった臨床的感覚が論理的な根拠をもって言語化され、クリニカルパールとして落とし込める喜びを感じられるであろう。

本書は多数の著者での執筆となっており、執筆者たちの臨床的背景により、記述内容の厚みや焦点の当て方にそれぞれの個性が感じられるが、なかでも編者であり最も多くの項目を執筆している國松淳和医師の担当部分のニッチな味つけは際立っている。マニュアルとなった本書のなかにも、“國松節”はしっかりと息づいている。

「基本」と「応用」の絶妙なバランスの上に立ったこの1冊は、評者のような“クニマニア”（勝手に名づけてみました）のみならず、初学者からベテラン指導医まで、「不明熱・不明炎症」を扱うすべての医師にとって欠かすことのできない必携のバイブルとして、長く愛されるものになるであろう。

G